

「協同教育と協同学習」再訪

関田一彦（創価大学）

キーワード：協同学習、協同教育、アクティブラーニング、生きる力、コンピテンシー

2004年に協同教育学会は第一回大会を久留米大学で開催した。あれから10年の時を経て、第十二回大会を再び久留米大学で行う。第一回大会の分科会において、私は本会の設立発起人の一人として、「協同教育と協同学習」と題するミニレクチャーを行った。そのときから随分と協同学習を取り巻く状況は変わってきている。そこでこの節目に際し、改めて協同教育とは何か、特に協同学習との関係を踏まえて考えてみたい。

1) 「アクティブラーニング時代」の到来

大学教育では数年来、主体的・能動的な学習を具現化する方途として、アクティブラーニングの導入が強調されてきた。そして次の学習指導要領改訂に向けた下村諮問では、初等・中等教育におけるアクティブラーニング導入方法の検討が課せられた。これを受け、今年に入って毎月のようにアクティブラーニングの本が出版されている。まさに、アクティブラーニング時代が幕を開けた感がある。

「アクティブラーニング」をどう捉えるか、必ずしも統一見解があるわけではない。そのため、現場では従来通りのグループ学習に終始しているケースも多い。協同教育の視点から、どのようなアクティブラーニングを志向すべきか、今まで以上に積極的に発信する必要がある。

2) 学習科学の台頭

知識構成型ジグソーなど協調学習の手法が注目されている。反転授業という名前とともにICTを活用した学習が当たり前になってくる。大学教育ではMoocsの普及が喧伝され、個人の学習能力による知識理解量の格差増進が試みられている。

人はどのように学ぶのか、特にその理解のプロセスを研究し、教育改善に役立てようとする研究分野に学習科学がある。様々な技術革新によって学習のプロセスの詳細が明らかになるにつれ、知識の構造化あるいは関連付けの広がりなど、その質を検証することが容易になってきた。

一方で、学習の質の向上に焦点があたる分、生徒にとっての学ぶ内容の意義を豊かにしようとする意識が後退する可能性が高まりはしないか、今はまだ、注意が必要にも感じる。内容の深い理解（質）と、その理解に至る学習体験（意義）とは同じものではない。質を論じるとき、比較可能な公有される基準が想定されるだろう。しかしながら、意義を論じ

るとき、当事者特有の基準が前提とされるであろう。

3) アドラー心理学など様々な人間性心理学の興隆

アドラー心理学については、本会の大会でも何度か紹介の機会を設けてきた。アドラーが提唱する「共同体感覚」の醸成は、協同教育においても大きな関心事であり、協同学習の実践家にとって、自らの実践の良し悪しを考えるうえで意識したいところである。

子どもたちが劣等感をバネに有能になっていくその先に、自他ともに必要とされ役立ち合える共同体を仮設するアドラーの考え方は、協同教育の思想的支柱の一つと捉えることができよう。

アドラー心理学以外にも、人間の可能性を積極的に認め、様々な対人的・社会的課題の達成・解決に資する心理学の新たな潮流が認められる。それらは、協同学習の理論的支柱であるグループダイナミクスの視点を取り込み、より包括的な人間の成長を考える枠組みを与えてくれる。授業の成否は人間関係の問題に帰着する、といえ言い過ぎのように聞こえるが、丁寧に咀嚼しておきたいテーマである。

4) 評価観の変化

21世紀型学力の育成が強調され、ある意味、そのために高大接続・入試改革が進められている。「生きる力」の育成が叫ばれてから久しいが、時代はますます生きる力を求めている。人間力（コンピテンシー）を育てることが学校教育の目的として改めて強調される。協働・協調は学習評価の対象になるのである。本会は設立の当初から、協同の精神の涵養は教育目標であると主張してきたが、ようやくその正当性が広く認められる時代になった。

5) まとめ

ジョンソンは協同学習の成果・効用として心理的側面への影響を挙げてきた。一般的な教師主導の授業に比べて学習成果（認知目標の達成）が優れることは当然として、それ以外の学習効果（態度目標の達成）を合わせて射程に収める協同学習の優位性は確かである。

ただし、50年を超える歴史を持つ協同学習は、その歴史ゆえに新しい言説や手法に安易に置き換えられようとしている。温故知新の言葉どおり、新しい理論や技術を協同をキーワードに繋ぎ、協同教育の世界に布置していく作業が今、強く求められている。

無論、協同教育の構築は私一人の手には余る大きな仕事である。今回の講演は、巨象を手探る盲人の一人として、断片的な話題提供に止まるであろう。それでも、これを機に、協同教育を手探る仲間が増え、その全体像を描き示すことができる日が近いことを予感している。